



Title	陳士元『夢占逸旨』内篇訳注（一）
Author(s)	清水, 洋子
Citation	中国研究集刊. 2008, 47, p. 60-77
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/61247">https://doi.org/10.18910/61247</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 陳士元『夢占逸旨』内篇訳注（一）

清水洋子

## 解説

本編は、明代中期の儒者である陳士元が著した『夢占逸旨』のうち、内篇を対象とした訳注試稿である。

『夢占逸旨』は、夢に関する十のテーマについて論じる「内篇」と、内容毎に夢を分類・分析する「外篇」とから成る。とりわけ内篇は、陳の夢に対する認識、及び当時の精神生活を窺い知る上で有益な資料である。

本書は、本文とそれに付随する自注から成る。自注の大半は、本文の論拠となる資料の引用だが、陳自身による補足説明も見られる。

また、逸文・異文を引用する本書はその資料的価値も高い。例えば、本書感変篇の自注に引く『潜夫論』夢列篇の全文は、現行本『潜夫論』の闕を補完するものである（詳細については、張覚『潜夫論全訳』上・下（貴州

人民出版社、一九九九年）を参照）。

また、近年 Richard E. Strassberg 氏による『夢占逸旨』の訳注（『Wandering Spirits: CHEN SHIYUAN'S ENCYCLOPEDIA OF DREAMS』/University Of California Press, Ltd. London, England 2008）が刊行された。参考となる点については、今後随時紹介してゆきたい。

## 凡例

・『夢占逸旨』の底本は、陳士元撰『帰雲別集』（道光十三年応城呉毓梅校刊同治十三年修補本）所収本（以下、「帰本」を称す）を使用し、呉省蘭輯『芸海珠塵』（民国五十七年台北芸文印書館景嘉慶中南匯吳氏聽彝堂刊本）所収本（以下、「芸本」と称す）を校本とする。  
・本文には【原文】【書き下し文】【現代語訳】【語注】

を付し、自注には【原文】【書き下し文】を付す。

・ 底本と校本との異同については、【原文】中の傍線部と丸数字とで示し、【校異】で詳細（校訂を要する場合など）を挙げる。

・ 旧字体や異体字は、必要な場合を除き新字体に改めた。

・ 文意の補足は（一）で、注記は（二）で示した。

・ 自注の引用文に出拠が明示されていない場合は、可能な限り補い、【書き下し文】の中で示した。

・ 自注の引用文には、陳の翻案あるいは誤引と思われるものもある。参考として、出拠の原文を本編末の注に付す。

## 序文

【原文】

嘉靖壬戌之秋八月既望、陳子坐蒲陽軒中、睇月色之漸高、  
忻桂華之始放、感盈虧之轉轂、念榮瘁之循環、於是舉酒  
命酌、興發成酣、枕簟載清、隕然就寢、

【書き下し文】

嘉靖壬戌の秋八月既望、陳子 蒲陽の軒中に坐す。月色の

漸く高まるを睇み、桂華の始めて放くを忻ぶ。盈虧の転轂を感じ、榮瘁の循環を念ふ。是に於いて酒を挙げ酌を命じ、興發して酣を成す。枕簟は清きを載け、隕然として寢に就く。

【現代語訳】

嘉靖壬戌（一五六二年）八月十六日の夜、わたくし陳子は蒲陽にある家中に座っていた。明るさを増しながら満ちてゆく月に心惹かれ、木犀の花が開き始めることを喜んでいた。月の満ち欠けが「止まることなく」巡り続けることに感じ入りつつ、巡りゆく榮枯盛衰に思いを馳せていた。そこで酒を挙げ酌を命じ、楽しんで飲むうち、心地よい気分になってきた。寝具のきれいなものを敷いて、そのまま眠りに就いた。

【語注】

○蒲陽……湖広（現在の湖北省 德安府応城県北部の地。

「陽」とは、当地の古蹟とされる「蒲騷城」の南を言うか。「蒲騷城 県北三十里。『左伝』桓十一年、楚屈瑕將盟貳軫。鄖人軍於蒲騷。」（『説史方輿紀要』卷七十七）  
○転轂……「轂」は、車輪の中心で輻を集めて車軸を通す部分。「轂也者、以為利軫也。輻也者、以為直指也。」

〔『周礼』冬官考工記・輪人〕、「利軛者、軻以無有爲用也。」（鄭玄注）、「三十輻共一軻、当其無有、車之用。」（『老子』第十一章）「軛軻」は急速に回転する車輪。終わりと始まり（ここでは月の満ち欠け）が永続的に、かつ速く繰り返されることの喩え（注<sup>1</sup>）。○隕然……飲酒によつて体勢が崩れるさま。「隕」は「頽」と通じる（注<sup>2</sup>）。「引觴滿酌、頽然就醉、不知日之入。」（『柳河東全集』「始得西山宴游記」）

### 【原文】

夢皓眉之老叟、披霞服而降庭、授余一函、金文眩目、宛蝌蚪之古篆、欲宣誦而未能、藏襲袖間、猶恐遺脫、獲茲奇玩、心復生疑、乃再拜而問叟曰、余与君遇、無乃夢乎、叟笑曰、何遇非夢、何夢非真、忽起譙声、余遂驚覺、坐而喟嘆、是何祥也、

### 【校異】

- ① 芸本は、「余」を「予」に作る。
- ② 芸本は、「蝌蚪」を「科斗」に作る。
- ③ 芸本は、「余遂驚覺、坐而喟嘆」を「予遂驚寤、晨興喟歎」とする。

### 【書き下し文】

夢に皓眉の老叟、霞服を披して庭に降る。余に一函を授く。金文目を眩ます。宛も蝌蚪の古篆のごとく、宣誦せんと欲するも未だ能わず。袖間に藏襲すること、猶お遺脱するを恐るるがごとし。茲の奇玩を獲て、心に復た疑を生ず。乃ち再拜して叟に問いて曰く、「余の君と遇うこと、乃ち夢なること無けん」と。叟笑いて曰く、「何の遇か夢に非ざらん、何の夢か真に非ざらん」と。忽ち譙声起き、余遂に驚きて覺む。坐して喟嘆するならく、「これ何の祥や」と。

### 【現代語訳】

夢の中で、仙人の服を着た白髪の老人が庭に降りたち、私に一通の封書を授けた。まばゆいほど目のくらむ金文（金泥で書かれた文字）である。どうやら蝌蚪文字のような篆書だが、声を出して読もうとしてもできなかった。私は、その封書を落とさないよう「慎重に」袖の中へ収めた。「さて」この不思議なものを手にして、さらにある疑問が心に浮かんだ。そこで、老人に再拜してこう尋ねた。「私があなたとこうしてお会いしていることは、夢ではないのでしょうか？」と。「すると」老人は笑ってこう

言った。「どの出会いが夢でないものか。どの夢がまことのものでないものか。」「(そうして)突然「カッ」と叱責の声があがったかと思うと、そこで私は驚いて目が覚めてしまった。明け方に起きてため息をついて言うに、「これは一体何の前触れなのか?」と。

【語注】

○霞服……仙人の姿、服装。○金文……金泥で書かれた文字。金属器に鑄込まれた文字(鍾鼎文)ではない。○蝌蚪之古篆……「蝌蚪(オタマジャクシの形をした文字)」「古篆(春秋戦国時代から秦代に通行した大篆・小篆)」共に、漢代以前に使用されていたとされる古文の一種。「科斗、虫名、蝦蟆子、書形似之。」(『尚書』序「科斗」『釈文』)○譙声……叱りとがめる声。

【原文】

研思終日、莫得其由<sup>①</sup>、嗟夫、夜之所夢也其真也耶、晨之喟嘆也其夢也耶、將詢兆於古人、慨輝經之墜地、輒拋見聞之末、撰茲内外之篇、用述微悰、題為逸旨、私常隱語、豈道醉夢之譏、遁世朽夫、聊增噓譚之助爾、

【校異】

- ① 芸本は、「由」を「繇」に作る。
- ② 芸本は、「所夢」を「遇叟」に作る。
- ③ 芸本は、「嘆」を「歎」に作る。「嘆」とは別字だがここでは同義。
- ④ 芸本は、「古」を「占」に作る。

【書き下し文】

研思すること終日なるも、その由を得ること莫し。嗟夫、夜の夢みる所やそれ真なるか、晨の喟嘆するやそれ夢なるか。將に兆を古人に詢ねんとするも、輝經の地に墜つるを慨く。輒ち見聞の末に拋りて茲の内外の篇を撰し、用て微かな悰<sup>わづらひ</sup>いを述べ、題して『逸旨』と為す。常ての隱語を拈<sup>ひ</sup>げんとするも、豈に醉夢の譏<sup>そし</sup>りを追れんや。遁世の朽夫、聊か噓譚<sup>うそたん</sup>の助を増すのみ。

【現代語訳】

一日中突き詰めて考えたが、その答えは得られなかった。ああ、夜に夢みたことが現実なのか、早朝にため息をついていたことが夢なのか。そこで「その夢の」兆を古人に尋ねようとしたが、「周王朝の伝統的な占法である」輝經が既に見えるべき影もないほど落ちぶれてしまつてい

るのを悲しむことしかできない。そこで、僅かな見聞をたよりにこの『夢占逸旨』内外篇を撰し、微かな思いを述べ、『逸旨』と題した。昔から謎となっていた夢の解釈をたすけ明らかにしたのだが、酔夢の譏りは免れられないだろう。隠居した老いばれが、いささか物笑いの種を提供するに過ぎないのである。

【語注】

○輝経……太陽の日旁ひがき(輝)の形状から占夢を行う方策。「輝謂日光氣。」(『周礼』春官・眡祲の鄭衆注)。「周礼」には、「眡祲、掌十輝之法、以觀妖祥、弁吉凶。」(春官・眡祲)、「掌三夢之法、一曰致夢、二曰騎夢、三曰咸陟。其經運注3十、其別九十。」(春官・大卜)とある。○常……かつて、むかし。「常、或作嘗。」(『詩』魯頌・閟宮箋)○隱語……本来の意味を言辭で隠したものの謎。「謎、隱語也。」(『説文解字』新附字)ここでは、夢に隠された本当の意味、意義を指す。○弘……たすける。「弘……、輔也。」(『広雅』釈詁)○這……のがれる。「這、逃也。」(『説文解字』)○噓譚……笑い話。「噓、大笑也。」(『説文解字』)

## 真宰篇第一

【原文】

本文

真宰窈冥、無象、無形、瀕濛、渾穆、氣數斯涵、

自注

莊子、若有真宰、而特不得其朕、

廣成子、窈窈冥冥、至道之極、

淮南子、古未有天地之時、窈窈冥冥、芒艾漠閔、

瀕濛鴻洞莫知其門、

【校異】

①芸本及び『淮南子』精神訓に従い「之時」を補う。

【書き下し文】

本文

真宰は、窈冥にして、象無く、形無し。瀕濛は渾

穆なり。氣の数は斯に瀝る。

自注

『莊子』(『斉物論』、真宰有るが若し。而れども特

だ其の朕わづを得ざるのみ注4。

『莊子』在宥)廣成子、窈窈冥冥、至道の極み注5。

『淮南子』(精神訓)、古え未だ天地有らず。窈

窈冥冥、芒艾漠閔、湏濛は鴻洞として其の門を  
知る莫し(注6)。

【現代語訳】

真宰「という万物創造の根源」は奥深くてほの暗く、  
現象としてもあらわれず、姿形もない。未だ形を成さな  
い気が湧き漂っている。気の数(道理・原理)はここに  
入っている。

【語注】

○真宰……万物生成の根源。主宰者。○窈冥……奥深く  
て暗く、測り知ることができないさま。「窈、深遠也。」  
「冥、窈。」(『説文解字』)「窈、各本作幽。」(段玉裁注)  
○湏濛鴻洞……湏濛は天地自然の元気。鴻洞は果てしな  
く合い連なるさま。「鴻洞、相連貌。」(『文選』洞簫賦李  
善注)○数……「上無固植、下有疑心、国無常經、民力  
必竭、数也。」(『管子』法法)、「数、理也。」(房玄齡注)  
また Richard E. Strassberg 氏は「気数」を「all the permuta-  
tions of qi-energy」<sup>1</sup>、次節の「数苞終始」を「numbers issued  
forth making beginnings and ends」とする。<sup>2</sup>「permutations(順  
列)」「number(数)」の語を用いる氏の訳出は、気のエ  
ネルギーが然るべき順列を備えていること、ならびに、

それがあらゆる物事の終始を包括していることを示すも  
のと考えられる。○涵……包み込む、はいる。「涵、容也。」  
○「詩」小雅・巧言毛伝) ○門……万物を生み出す精妙な  
作用がはじまるところ。「衆妙之門。」(『老子』第一章)

○広成子……老子の別称ともいう。「或云、即老子也。」  
『莊子』在宥「広成子」『釈文』

【原文】

【本文】 動静陰陽、数苞終始、

【自注】

周子\*、太極動而生陽、静而生陰、  
列子\*、太易者、未見氣也、易無形埒<sup>②</sup>、易變而為一、  
一變而為七、七變而為九、九變者究也、復變而為一、  
老子、道生一、一生二、二生三、三生万物、万物  
負陰而抱陽、

【校異】

- ① 芸本は「氣判陰陽、数苞終始」とする(注7)。「苞」は「包」と通じる。「音包。本或作包。」(『莊子』天運「苞裹」『釈文』)
- ② 芸本は、「埒」を「埒<sup>れい</sup>」に作る。
- ③ 芸本は、「變」を脱し「九者究也」とする。

④芸本は、「一」を「一一」に作る。

\*芸本は、「周子」「列子」「老子」の下にそれぞれ「曰」を付す。

【書き下し文】

【本文】 動静、陰陽、数は終始を包ぬ。

【目注】 周子『太極図説』、太極動にして陽を生じ、静にして陰を生ず（注8）。

『列子』『天瑞』、太易とは、未だ氣を見ざるなり。

易は形埒けいごうなし。易變じて一と為り、一變じて七と為り、七變じて九と為る。九變するは究なり。復た變じて一と為る（注9）。

『老子』『第四十二章』、道は一を生ず。一は二を生ず。二は三を生ず。三は万物を生ず。万物は陰を負いて陽を抱く（注10）。

【現代語訳】

〔真宰の〕動静〔から〕陰陽〔の氣が生まれ〕、その原理は〔万物の〕始まりから終わりまでのことを包括してゐる。

【語注】

○太極……『易』繫辭伝のいう宇宙万物生成の根本。「易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦、八卦定吉凶、吉凶生大業。」（『易』繫辭伝上）○太易……『列子』のいう宇宙万物生成の根本。『列子』天瑞篇は、太易が感覺で把握できるものではないことを述べ（「視之不見、聽之不聞、循之不得、故曰易也。」）（注11）、以下、「太初」「太始」「太素」と、具体的形象の生じる様子を段階的に記している（注12）。○形埒……かたち。『淮南子』本經訓に「含氣化物、以成埒類」とあり、その高誘注に「埒、形也」とある。○道……『老子』のいう宇宙万物生成の根本。『道生一、一生二、二生三、三生万物。』（『老子』第四十二章）

【原文】

【本文】 天旋、地凝、兩間定位而人物生矣、

【目注】 淮南子\*、天運、地滯、輪転而無廢、

礼統曰、天地元氣之所生、万物之祖也、

【校異】

\*芸本は、「淮南子」の下に「曰」を付す。

【書き下し文】

【本文】 天は旋り、地は凝る。両間は位を定め人物生ず。

【自注】 『淮南子』(原道訓)、天は運り、地は滞まる、輪転して廢むなし(注13)。

『礼統』、『太平御覽』引に曰く、天地は元氣の生ずる所にして、万物の祖なり(注14)。

【現代語訳】

天はめぐり、地はかたまる。「そうしてできた」天と地との間には、人や物が生まれる。

【語注】

○両間……天と地との間、中間。人や事物が生まれるスペース。○定位……天地それぞれの位置が定まり、「両間」が生じること。「形於上者謂之天、形於下者謂之地、命於其両間者、謂之人。」(韓愈「原人」)、「天地定位、山沢通氣、雷風相薄、水火不相射。」(『易』説卦伝)○廢……「廢、休也。」(高誘注)○礼統……梁の賀述撰。『白虎通義』の形式に倣い礼制を統括した書(馬国翰『玉函山房輯佚書』)。自注中の「天地者元氣之所生、万物之祖」は、『白虎通義』天地篇の記載と類似する(注15)。また、自注と同じように「礼統曰、……」としてこの句を引く記

載は、『太平御覽』の他、『芸文類聚』、『後漢書』注(班固列伝)、『礼記』礼運篇の『釈文』にも見える。

【原文】

【本文】 人葆中和肖乎天地、精神融貫無相盪也、

【自注】 列子\*、<sup>①</sup>中和氣者、為人、

王介甫詩注\*、人之精神与天地同流、此占夢之所以設也、

【校異】

① 芸本は、「中」を「沖」に作る。

② 芸本は、「沖」を「冲」に作る。「冲」は「沖」の異体字。「中」と「冲」とは通用。「冲即中也。又精誠篇『執冲含和』、淮南泰族訓冲作中、皆冲中通用之証。」(楊伯峻撰『列子集解』)

\* 芸本は、「列子」「王介甫詩注」の下にそれぞれ「曰」を付す。

【書き下し文】

【本文】 人の中和を葆<sup>たも</sup>つは天地に肖<sup>に</sup>る。精神は融貫し相い盪<sup>たぶ</sup>く無し。

【自注】『列子』(天瑞)、中和の気は、人と為る(注16)。

王介甫詩注(小雅・斯干)、人の精神は天地と流れを同じくす(注17)。此れ占夢の設くる所以なり。

【現代語訳】

人間が気の調和を保っている状態は、天地にかたどっている。「だから、人の」精神は「天地と」通じ合い、天地に背くことはない。

【語注】

○中和……天地間の陰陽が中和した気。「道生一、一生二、二生三、三生万物。万物負陰而抱陽、沖氣以為和。」(『老子』第四十二章) ○肖……にる、かたどる。『列子』揚朱篇に「人肖天地之類、懷五常之性、有生之最靈者也」とあり、その張湛注に「肖、似也」とある。○融貫……融會貫通。とけて一つとなり通じ合うこと。○鑿……もとる、そむく。「鑿、弼戾也。」(『説文解字』)、「按此乖戾正字。今則戾行而鑿靡矣。」(段玉裁注) ○王介甫詩注……介甫は、北宋の王安石。「詩注」とは、『周礼』、『詩』、『書』に関する安石の注釈書『三経新義』に収録される『詩』解釈を指す。『詩経新義理』、『詩義』とも呼ばれるこの解釈書は早くに亡佚しているが、輯佚書によって

その一部を見ることが出来る(注17参照)。

【原文】

【本注】

天氣為魂、地氣為魄、

【自注】

靈樞經\*、天之在我者德也、地之在我者氣也、德流

氣薄而生者也、故生之來、謂之精、兩精相搏、謂之神、隨神往來者、謂之魂、並精而出入者、謂之魄、

左伝、子産\*、物生始化曰魄、既生魄、陽曰魂、

列子\*、精神者天之分、骨骸者地之分、属天、清而散、属地、濁而聚、

白虎通\*、魂主於情、魄主於性、

高誘曰、魂人陽神也、魄人陰神也、

鄭玄曰、嘘吸出入者、氣也、耳目之精明者、為魄、氣則魂之謂也、

朱子\*、魂属木、魄属金、所以言三魂七魄、是金木之數也、

【校異】

① 帛本は、「天」を「天地」に作る。芸本及び『靈樞経』に従い改めた。

② 芸本は、「生者」二文字分が空格(「德流氣薄而□□也」)。

\*芸本は、「靈樞經」「子産」「列子」「白虎通」「朱子」の下にそれぞれ「曰」を付す。

【書き下し文】

本文 天の氣は魂と為り、地の氣は魄と為る。

自注 『靈樞經』〔本神〕、天の我に在る者は徳なり。地

の我に在る者は氣なり。徳流れ氣薄<sup>せま</sup>りて生るる者なり。故に生の來たるは、之を精と謂う。兩精相い搏つ、之を神と謂う。神に隨いて往來する者、之を魂と謂う。精に並びて出入する者、之を魄と謂う<sup>注18</sup>。

『左伝』〔昭公七年三月〕、子産、物生まれ始めて化するを魄と曰う。既に魄を生ずれば、陽をば魂と曰う<sup>注19</sup>。

『列子』〔天瑞〕、精神は天の分。骨骸は地の分。天に属するは、清にして散る。地に属するは、濁にして聚まる<sup>注20</sup>。

『白虎通』〔情性〕、魂は情を主り、魄は性を主る<sup>注21</sup>。高誘『淮南子』説山訓注〕曰く、魂は人の陽神なり。魄は人の陰神なり<sup>注22</sup>。

鄭玄『礼記』祭儀注〕曰く、嘘吸して出入するは、氣なり。耳目の精明なるは、魄と為すと。氣とは

則ち魄の謂いなり<sup>注23</sup>。

朱子『朱子語類』鬼神〕、魂は木に属し、魄は金に属す。三魂七魄と言う所以は、これ金木の数なり<sup>注24</sup>。

【現代語訳】

天の氣は魂となり、地の氣は魄となる。

【語注】

○魂魄……人間の生命活動における源を示す概念。その解釈は一通りではないものの、魂・魄がそれぞれ人間の精神と肉体とを示す対応関係にある、との認識はおおむね変わらない。また、「魂氣歸于天、形魄歸于地」(『礼記』郊特牲)ともあるように、人の死後、魂・魄はそれぞれが帰属する天・地に帰るとされた。『夢占逸旨』では、「天氣為魂、地氣為魄」以下、更に氣の属性(「清」「濁」)に応じた魂魄間の従属関係、魂魄の性格について記される。○薄……迫る。「薄、迫也。」(『左伝』僖公二十三年伝「薄而觀之」杜預注)○三魂七魄……『抱朴子』に初出と考えられる。神々との連絡における体内の中継点とされる<sup>注25</sup>。道教文献の中には、「三魂」「七魄」それぞれについて詳細な記載が見える<sup>注26</sup>。三魂七魄の「魂」

「魄」には複雑な性格が付与されており、整然とした魂魄二元論で理解することは難しい(注27)。

【原文】

本文 氣清者、魄從魂、氣濁者、魂從魄、從魂為貴、從

魄為賤、清魂為賢、濁魄為愚、此壽夭禍福之閫也、

【目注】

丹鉛錄、靈魂為賢、厲魄為愚、輕魂為明、重魄為暗、揚魂為羽、鈍魄為毛、

【校異】

\*芸本は、「丹鉛錄」の下に「曰」を付す。

【書き下し文】

本文 氣の清なる者は、魄魂に従う。氣の濁なる者は、

魂魄に従う。魂に従えば貴と為り、魄に従えば賤と為る。清魂は賢と為り、濁魄は愚と為る。此れ壽夭禍福の閫なり。

【自注】

『丹鉛錄』『丹鉛統録』魂魄、靈魂は賢と為り、厲魄は愚と為る。輕魂は明と為り、重魄は暗と為る。揚魂は羽と為り、鈍魄は毛と為る(注28)。

【現代語訳】

氣が清らかな者は、魄が魂に従う。氣が濁っている者は、魂が魄に従う。魂に従えば高貴となり、魄に従えば卑賤となる。清魂だと賢明になり、濁魄だと暗愚になる。これら(氣の清濁・清魂と濁魄)は、壽夭禍福を分ける境界である。

【語注】

○閫……門のしきい(門の内と外とを区画するために敷く横木)。転じて、あるものとあるものを区切る境界。ここでは、氣の清濁や清魂濁魄に起因する属性の変化が、「壽夭禍福」の原因となること。「閫、音苦本反。謂門限也。」(『史記』馮唐伝「閫以内者、寡人制之」正義)○丹鉛錄……書名に「丹鉛」の語を冠する楊慎の雜著數種の総称。主なものとして、『丹鉛余録』、『丹鉛統録』、『丹鉛閫録』(散佚するが『総録』に収録される)、楊自身がそれらを編集し直した『丹鉛摘録』、門人の梁佐が諸録を一編にまとめて重複を除き、分類整理した『丹鉛総録』などがある。特に『余録』、『統録』、『摘録』、『総録』の四部は補完し合う関係にあるとされる(「以『総録』補三録之遺、以三録正『総録』之誤、仍然慎之完書也。」、『四庫全書総目提要』)。楊慎の字は用修、号は升庵。修撰

(国史の編修を司る官)、経筵講官を経て翰林学士となる。

【原文】

【本文】 有貴而賢、有賤而愚、有寿而福、有疾而禍、有貴

而愚、有賤而賢、有寿而禍、有疾而福、世変無常、

幾則先肇、魄能知来、魄能蔵往、

【自注】

魂強則善悟、魄強則善記、衆人以魄撰魂、聖人以魂運魄、

【校異】

①芸本は、「常」を「恒」に作る。

②帰本・芸本には「聖人以魄撰魂、衆人以魂運魄」とある。ここでは、典拠と思われる『丹鉛統録』、『関尹子』

(注29を参照)に従い改めた。

【書き下し文】

【本文】 貴にして賢なる有り、賤にして愚なる有り、寿に

して福なる有り、疾にして禍なる有り。貴にして

愚なる有り、賤にして賢なる有り、寿にして禍な

る有り、疾にして福なる有り。世変じて常無きも、

幾は則ち先ず肇まる。魂は能く来を知り、魄は能く往を蔵む。

【自注】

魂強ければ則ち善く悟り、魄強ければ則ち善く記す。(以下、『丹鉛統録』「魂魄」、『関尹子』「四符」)

衆人は魄を以て魂を撰い、聖人は魂を以て魄を運らす(注29)。

【現代語訳】

〔だから〕高貴で賢明だということがあり、卑賤で暗愚だということがあり、長寿で幸福だということがあり、短命で不幸だということがある。〔そうかと思えば〕高貴で暗愚だということがあり、卑賤で賢明だということがあり、長寿で不幸だということがあり、短命で幸福だということがある。〔このように、人の命運は〕世々変化して一定ということはないが、その幾は先んじておこるものだ。魂は未来を知ることができ、魄は既往の事柄を記憶することができる。

【語注】

○幾……事のはじめの微かな動き。きざし。『易』繫辞伝下に「幾者、動之微。吉之先見者也」とある。○魄能知来、魄能蔵往……『丹鉛統録』魂魄に同様の記述が見え

る。「知来」「藏往」については、『易』繫辭伝上に「神以知来、知以藏往」（神妙さによって未来を知り、明知によって既往の事象をおさめる）とあるが、「魂」「魄」との関連はなく、文意は必ずしも同一ではない。

【原文】

【本文】人之昼興也、魂麗於目、夜寐也、魄宿於肝、魂麗於目、故能見焉、魄宿於肝、故能夢焉、夢者神之遊、知来之鏡也、

【自注】朱子、人之精神与天地陰陽流通、故昼之所為、夜之所夢、其善惡吉凶、各以類至、  
\* 朱子、天地之鑑也、万物之鏡也、

【校異】

① 帰本は、「吉凶」を「神知」とするが、芸本と『詩集伝』に従い改めた。

\* 芸本は、「朱子」「莊子」の下にそれぞれ「曰」を付す。

【書き下し文】

【本文】人昼に興くれば、魂目に麗く。夜に寐ぬれば、魄肝に宿まる。魂目に麗く、故に能く見る。魄

肝に宿まる、故に能く夢みる。夢は神の遊にして、来を知るの鏡なり。

【自注】

朱子『詩集伝』小雅・斯干、人の精神は天地陰陽と流通す。故に昼の為す所、夜の夢みる所、其の善惡吉凶、各おの類を以て至る（注30）。

『莊子』「天道」、天地の鑑なり。万物の鏡なり（注31）。

【現代語訳】

人が昼間起きていると、魂は目に付着する（魄が活動する）。夜間眠りにつくと、魄は肝にとどまる（魂が活動する）。魂が目につ着する昼間は「魄の活動によってもの」を見ることができ、魄が肝にとどまる夜間は「魂の活動によって」夢をみることが出来る。夢は、精神（魂）が「意識を離れて」浮遊する（こととみる）ものであり、未来を映し出す鏡である。

【語注】

○人之昼興也く故能夢焉……これと類似する記述は、『丹鉛統録』魂魄、『関尹子』四符にも見える。『丹鉛統録』には、「蓋魄之藏、魂拘之。魂之游、魄囚之。魂昼属目、魄夜属肝。寓目能見、舍肝能夢」のように、魂魄の一方が（目や肝に）とどまる間は、もう一方が活動するとあ

る(注32)。したがって、『夢占逸旨』本文における魂魄の対応関係は、

昼興 || 魂魄の拘束 || 魂魄の活動 || 魂麗於目 || 能見 || 蔵往

夜寐 || 魂魄の拘束 || 魂魄の活動 || 魂宿於肝 || 能夢 || 知来

となろう。この点に関しては、劉文英氏『夢的迷信与夢的探索』(中国社会科学出版社、一九九七年)も、「『魄宿于肝』既能维持人的生命，又停止了耳目听闻，这样魂魄就可以离身而外游」(三二頁)と、身体機能が休息する「魄宿於肝」の状態は、同時に魂が身体を離れて浮遊する状態でもあると解釈する。○麗……つく。附着する。『周礼』秋官・大司寇に「凡万民之有罪過，而未麗於法，而害於州里者」とあり、その鄭玄注に「麗、附也」とある。○知来之鏡……『莊子』における「天地之鑑」「万物之鏡」は、本来「聖人之心」のことをいう。その成玄英疏に「鑑天地之精微、鏡万物之玄蹟」とあるように、「聖人之心」は、天地万物の靈妙で奥深い姿をありのまま映し出すとされる。「知来之鏡」とは、夢もまた、未来におこる事象の微妙なきざしを明確に映し出す「鏡」のようなものであることを言う。

【原文】

【本文】 故曰、神遇為夢、形接為事、

【自注】 ①列子、神遇為夢、形接為事、故昼想夜夢、形神所

遇、神形不接夢自消、

莊子曰、其寐也、魂交、其覺也、形開、

【校異】

① 帰本は「莊子」とするが誤り。芸本に従い「列子」に改めた。

② 帰本は「昼想夜(、形神所遇)」とする。芸本及び『列子』に従い改めた。

③ 芸本及び『列子』は、「神形不接夢自消」を「神凝者想夢自消」とする。

【書き下し文】

【本文】 故に曰く、「神遇えば夢と為り、形接すれば事と為る」と。

【自注】 『列子』(周穆王)、神遇えば夢と為り、形接すれば事と為る。故に昼に想い夜に夢みるは、形神の

遇う所なり。神形接せざれば夢は自ら消ゆ(注33)。

『莊子』(齊物論)曰く、其の寐ぬるや、魂交わる。

其の覚むるや、形開く(注34)。

【現代語訳】

ゆえに、「精神が〔外物に〕出会えば夢となり、肉体が〔外の現象と〕接触すれば知覚となる」と言う。

【語注】

○神遇……「神」(精神)が外物に接触して夢となること。『莊子』の「魂交」も同様。○形接……「形」(肉体)が外物に接触して知覚現象となること。『莊子』の「形開」も同様。○神形不接……「神」(精神)、「形」(肉体)ともに外物と接触しないこと。もしくは、「神」と「形」との連絡そのものが希薄なこと。前者の場合、「神」は『列子』の「神凝」(「校異」③参照)と同様の状態であると見える。「神凝」は、精神がひっそりと静かで、外物に接触しないこと(「凝」は静かで動かないこと。『莊子』逍遙遊篇「其神凝」の成玄英疏に「凝、静也」とある)。こうした様子は、道家における理想的な忘我の境地、もしくはそれを体現した「真人」「神人」の描写の中に見える(注35)。後者は、「神」「形」個別の状態というよりも、両者の潜在的なつながりに重点を置く理解と言える。このことは、陳士元自身が「神触於形、然後有夢。無触則

雖寐而不夢」(昼夜篇自注)と、「神」「形」の直接的な關係を述べていることとも繋がる。陳士元が一部の道家説に否定的な態度を示していることも考え合わせると(注35参照)、『列子』本来の記述に変化が見える点も(「校異」③)、道家説に必ずしも依拠しないという陳の志向の一端を示すものと考えることができる。

訳者注

- (1)「通於學者、若車軸軛轂之中、不運於己、与之致千里、終而復始、軛無窮之源。」(淮南子)説山訓)以下、『淮南子』については、何寧撰『淮南子集釈』(中華書局、二〇〇六年)を用いる。
- (2)「礼記」曲礼上「凡遺人弓者張弓尚筋弛弓尚角」の鄭玄注に「皆欲令其下曲隕然順也」、その『釈文』に「隕、本又作頽。徒回反、順貌」とある。
- (3)なお、「運」と「輝」とは通用。「運或為輝當輝、是視礙所掌十輝也。」鄭玄注)
- (4)「若有真宰、而特不得其朕。」(『莊子』齊物論)以下、郭慶藩撰『莊子集釈』(中華書局、一九九五年)を用いる。
- (5)「広成子蹶然而起曰、善哉問乎。來。吾語女至道。至道之精、窈窈冥冥。至道之極、昏昏默默。」(『莊子』在有)

(6) 「古未有天地之時、惟像無形、窈窈冥冥、芒艾漠漠、瀕濛鴻洞、莫知其門。」〔淮南子〕精神訓〕

(7) 帛本の「動靜陰陽」、芸本の「氣判陰陽」は、共に自注所引の『太極図説』に基づいて解釈することができる。即ち、万物生成の過程において、「真宰」が「動靜」することによって「陰陽」の氣という変化の原理が現れることを述べる句と考えられる。「動靜」と「陰陽」とが連続する事例は、『朱子語類』の「元亨利貞是備箇動靜陰陽之理」(卷一)に見える。これも、『太極図説』における動靜・陰陽の循環に基づいた言葉と考えられる。

(8) 「無極而太極。太極動而生陽。動極而靜、靜而生陰。」〔太極図説〕

(9) 「太易者、未見氣也。太初者、氣之始也。太始者、形之始也。太素者、質之始也。氣形質具而未相離、故曰渾淪。渾淪者、言万物相渾淪而未相離也。之不見、聽之不聞、循之不得、故曰易也。易無形埒、易變而為一、一變而為七、七變而為九、九變者究也、乃復變而為一。」〔列子〕天瑞〕以下、『列子』については楊伯峻撰『列子集解』(中華書局、一九九一年)を用いる。『列子集解』の注記には、「埒埒異義、埒之作埒、盖假借字」とある。『埒』は田を耕すこと、「埒」は囲い、一定範囲の意。これはもと『乾鑿度』の文。のちに『列子』に採用されたものであろう。

(10) 「道生一、一生二、二生三、三生万物。万物負陰而抱陽、冲氣以為和。」〔老子〕第四十二章〕以下、朱謙之撰『老子校釈』(中華書局、一九八四年)を用いる。

(11) 『老子』第十四章「視之不見、名曰夷」も同様。「夷」は「易」と通じる。「夷、易也。」〔詩〕周頌・天作毛伝〕

(12) 「昔者聖人因陰陽以統天地。夫有形者生於無形、則天地安從生。故曰、有太易、有太初、有太始、有太素。太易者、未見氣也。太初者、氣之始也。太始者、形之始也。太素者、質之始也。氣形質具而未相離、故曰渾淪。渾淪者、言万物相渾淪而未相離也。」〔列子〕天瑞〕

(13) 「天運地滯、輪転而無廢。」〔淮南子〕原道訓〕

(14) 「礼統曰、天地者元氣之所生、万物之祖也。」〔太平御覽〕天部一(天部上)〕以下、『太平御覽』(台湾商務印書館景四部叢刊三編、一九九二年)を用いる。

(15) 「天者何也。天之為言鎮也。居高理下、為人鎮也。地者、元氣之所生、万物之祖也。地者易也。言養万物懷任交易變化也。」〔白虎通〕天地)〕以下、陳立撰『白虎通疏証』(中華書局、一九九四年)を用いる。なお陳立は、傍線部が冒頭に「天」の一字を脱する文であると指摘し、本来「天地者、元氣之所生、……」となるこの一文を「天者何也」に前置すべきであると述べている。

(16) 「清輕者上為天、濁重者下為地、冲和氣者為人。故天地含

精、万物化生。」〔列子〕天瑞

(学林出版社、一九八四年)を用いる。

(17) 『詩義』の輯佚書としては、程元敏『三經新義輯考彙評』(一) — 詩經 (國立編譯館主編、一九八六年)、邱漢生輯校『詩義鈎沈』(中華書局、一九八二年)を参照。共に、呂氏家塾讀詩記「小雅・斯干」の注釈「〔王氏曰〕人之精神与天地陰陽流通」を挙げる。ただし、自注の引用とは完全に合致しない。王安石『周官新義』春官・占夢には「人之精神与天地同流」とあるため、「王介甫詩注」が誤記の可能性もある。

(23) 「氣謂嘘吸出入者也。耳目之聰明為魄。合鬼神而祭之。聖人之教致之。」〔礼記〕祭義「子曰、氣也者、神之盛也。魄也者、鬼之盛也。合鬼与神教之至也。」鄭玄注

(18) 「岐伯答曰、天之在我者德也。地之在我者氣也。德流氣薄而生者也。故生之来、謂之精。兩精相搏、謂之神。随神往来者、謂之魂。並精而出入者、謂之魄。」〔黄帝内經靈樞經〕本神 四部叢刊初編『靈樞經』を用いる。

(24) 「魂属木、魄属金。所以說三魂七魄、是金木之数也。」〔朱子語類〕鬼神 以下、黎靖德編『朱子語類』(中華書局、一九九九年)を用いる。

(19) 「及子產適晉、趙景子問焉。曰、伯有猶能為鬼乎。子產曰、能。人生始化曰魄、既生魄、陽曰魂。」〔左伝〕昭公七年

(25) 「抱朴子曰、師言欲長生、当勤服大藥。欲得通神、当金水分形。形分則自見其身中之三魂七魄、而天靈地祇皆可接見、山川之神、皆可使役也。」〔抱朴子〕地真 以下、王明撰『抱朴子内篇校积』(中華書局、二〇〇二年)を用いる。

(20) 「精神者、天之分。骨骸者、地之分。属天清而散、属地濁而聚。」〔列子〕天瑞

(26) 「其夾靈、胎光、幽精三君、是三魂之神名也。」其第一魄名尸狗。第二魄名伏矢。第三魄名雀陰。第四魄名吞賊。第五魄名非毒。第六魄名除穢。第七魄名臭肺。此皆七魄之陰名也。身中之濁鬼也。」(皇天上清金闕帝君靈書紫文上經)、『正統道藏』第十九冊 洞神部、新文豐出版公司)その他、『太上除三尸九虫保生經』(『正統道藏』第三十一冊 洞神部)、『雲笈七籤』卷五十四にも三魂七魄についての記載が見える。

(21) 「魂魄者、何謂。魂猶伝伝也。行不休也。主於情。少陽之氣、故動不息、于人為外、主于情也。魄者、猶迫然著人也。此少陰之氣、象金石著人不移、主於性也。」〔白虎通〕性情

(27) 藤野岩友「雲笈七籤」に見える三魂七魄」〔城南漢学〕十二、一九七〇年)を参照。

(22) 「魂人之陽精也。陽精為魂。陰精為魄。」〔吕氏春秋〕禁塞「費神傷魂」高誘注) 以下、陳奇猷校积『吕氏春秋校积』

(28) 「靈魂為賢、厲魄為愚。輕魂為明、重魄為暗。揚魂為羽、

鈍魄為毛。」(楊慎『丹鉛統錄』魂魄)同様の記述は『関尹子』四符にも見える。以下、『丹鉛統錄』は景印文淵閣四庫全書『丹鉛余録』所収『丹鉛統錄』(台湾商務印書館)、『関尹子』は王雲五編・宋明善本叢書十種・明刊本『子集』(台湾商務印書館、一九六九年)を用いる。

(29) 「衆人以魄撰魂、聖人以魂運魄。」(『丹鉛統錄』魂魄)、「衆人以魄撰魂者、金有余則木不足也。聖人以魂運魄者、木有余則金不足也。」(『関尹子』四符)

(30) 「或曰、夢之有占何也。人之精神与天地陰陽流通、故昼之所為、夜之所夢、其善惡吉凶、各以類至。」(『詩集伝』小雅・斯干)以下、四部叢刊統編『詩集伝』(台湾商務印書館、一九六六年)を用いる。

(31) 「聖人之静也、非曰静也善故静也。万物无足以鏡心者、故静也。水静則明燭鬚眉、平中準、大匠取法焉。水静猶明、而況精神。聖人之心静乎。天地之鑑也、万物之鏡也。」(『莊子』天道)

(32) 『丹鉛統録』と『関尹子』との間にも異同は見えるが、大意は変わらない。「蓋魄之藏、魂俱之。魂之游、魄因之。魂昼寓目、魄夜舍肝。寓目能見、舍肝能夢。」(『関尹子』四符)

(33) 「子列子曰、神遇為夢、形接為事。故昼想夜夢、神形所遇。故神凝者想夢自消。」(『列子』周穆王)

(34) 「其寐也魂交、其覺也形開。与接為構、日以心開。」(『莊

子』齊物論)

(35) 「心凝形积、骨肉都融、不覺形之所倚、足之所履。」(『列子』黄帝)、「藐姑射之山有神人居焉。肌膚若冰雪、淖約若处子。不食五穀、吸風飲露。乘雲氣、御飛龍、而遊乎四海之外。其神凝、使物不疵癘而年穀熟。」(『莊子』逍遙遊) 自注が引く『列子』の「……神凝者想夢自消」も、本来は「真人」についての記述である(後に「信覺不語、信夢不達。物化之往来者也。古之真人、其覺自忘、其寐不夢」との記述が続く)。ただし、陳士元は道家説である「真人」の「其寐不夢」については否定するため(『夢占逸旨』聖人篇)、ここでは論拠の対象外としているようである。